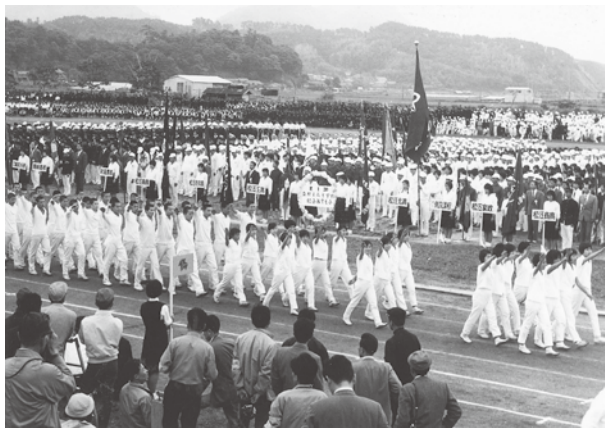


島根県高等学校体育連盟

これまでのあゆみ

昭和24年、島根県高等学校体育連盟設立。創設後しばらくは高体連の社会的認知度は低く、まずは他の体育団体や世間に認識してもらう必要があった。このような状況を打開したのは、昭和30年、松浦俊明会長が高体連役員として初めて島根県体育協会の副会長に選任されたことであった。これにより、高体連の地位向上と認知度が大きく前進したとされている。

昭和38年、第1回島根県高等学校総合体育大会開催。「他県でやっていることは本県でもできるはずだからやってみよう」との辻原弘一会長の言葉が始まりとされている。県高校総体の開催に関しては、予算の確保をはじめ想像以上の課題が山積しており、計画当初は反対意見も多かったようだが、各学校、県教育委員会、競技団体等の関係団体の多大なる協力と支援のもと、ようやく開催にこぎつけたとされている。こうして参加42校、14競技、選手3329人の参加を得て、記念すべき第1回大会が開催された。以降、県総体は数々のドラマを繰り広げながら歴史を重ね、平成24年には第50回記念大会を参加51校、29競技、選手6331人で開催するまでとなった。



第1回県高校総体総合開会式（昭和38年 松江市陸上競技場）

平成16年、全国高校総体「中国04総体」開催。8月1日、台風10号の影響による前夜までの強い雨風は嘘のようにおさまり、県立浜山公園陸上競技場で行われた総合開会式は、皇太子殿下のご臨席を賜り、約1万6千人が参加し盛大に行われた。競技では、地元の大応援が大きな力となり、選手たちは例年以上に奮闘した。「高校生一人一役活動」では、中学生の力を借りたり、1人で二役も三役も担当する生徒もいるなど、生徒数が少ない本県ならではの困難もあったが、おもてなしの心を大切に積極的に活動した。大会スローガンである「君の輝く一瞬が今 伝説となる」のもと、県内高校生の献身的な取り組みと熱意によって盛大かつ成功裏に終え、まさに新たな歴史と伝説をつくる大会となった。

現在の状況

令和5年度、県高体連は設立から75年目を迎え、第61回県高校総体は参加50校、30競技、選手5693人で実施した。体罰根絶への取り組み、教職員の働き方改革、部活動の地域移行をはじめとする部活動改革等、高体連を取り巻く課題は山積するが、特に令和5年度から部員数不足による合同チームの全国大会出場が一部の競技で可能となるなど、部活動にも少子化の影響が表れ始めており、大きな過渡期を迎えている。本県では、くにびき国体のレガシーともいえるホッケー、カヌーなど、安定して全国トップレベルで活躍する競技もある一方で、部員数が減り、部の存続すら危ぶまれる競技も少なくない。現在は中学校を中心に進められている部活動改革の波が、やがて高体連へ波及する日もそう遠くはないと囁かれる中で、部活動の意義や持続可能な部活動のあり方、高体連の存在意義そのものを問われる時代となっている。



令和4年度全国高校総体総合開会式前のテントにて（徳島県徳島市）

これから

前出の諸課題解決に向けた取り組みを進めると同時に、令和7年には2度目の中国ブロックインターハイとなる「中国総体2025」を広島県を主会場に開催予定である。県内ではフェンシング、バレーボール男子、なぎなた、レスリング、カヌー、体操競技を開催することになっており、当面は県実行委員会としての大会準備や高校生活動の推進に注力することになる。また、2030年の「島根かみあり国スポ・全スポ」開催に向けたさまざまな取り組みと、県競技力向上対策本部による選手強化への協力も必要となってくる。

県高体連としては、何よりも「高校生の健全育成を目指す」という高体連創設の趣旨を見失うことなく、すべての高校生がさまざまな角度から体育・スポーツ活動に積極的に関わることで、心身の健康の保持増進はもとより、自己の能力や人格を高め、成長の糧となるよう活動を展開していく所存である。